

東亜同文書院記念基金会ニュース

第17号

2015年4月～2016年3月



Contents



第22回 東亜同文書院記念基金会授賞式 -02

東亜同文書院記念基金特別奨励賞・荣誉賞授与 -10

書院の皆さん、今に思いを語る -11

本間先生欽慕の会・根津山洲先生墓参・荒尾東方斎先生墓参 -21

東亜同文書院大学記念センター活動レポート -23

発行／愛知大学東亜同文書院大学記念センター

第22回東亜同文書院記念基金会授賞式

第22回東亜同文書院記念基金会授賞式が2016年1月22日、霞山会館にて催されました。

この顕彰事業は、東亜同文書院記念基金会によるものであり、その目的は、東亜同文書院およびその経営母体であった東亜同文会にかかわる研究や調査成果、および啓蒙的活動のうち、顕著な実績を認められた個人、団体や組織を顕彰するものです。東亜同文書院記念基金会を構成する滬友会（書院同窓会。2007年解散）、霞山会、愛知大学東亜同文書院大学記念センターからの推薦により同理事会において選出しており、1993年の第1回表彰以来、本年度で第22回目となります。

これまで、書院生の大旅行に関する研究成果や東亜同文会の資料に基づく研究、東亜同文書院や東亜同文会の出版物のデータベース化事業、東亜同文書院生や卒業生による日中交流に関するメディア報道、その他日中交流の活発な活動などの成果に対して顕彰してまいりました。

第22回となる今回は、記念賞として小崎昌業氏が選ばれました。

〔記念賞受賞者〕

小崎 昌業 氏

東亜同文書院大学の第42期生並びに愛知大学（旧制）の第1期生として、歴史的に関わりが深いこれら2つの大学の発展のため、一般財団法人霞山会の理事また顧問として、同時に、学校法人愛知大学の監事も務められるなど生涯を懸けてご尽力されてこられた。また、外交官としてのご活躍、東亜同文会の昭和期の諸活動の取りまとめ、愛知大学に引き継がれた現地主義教育へのご指導など、実質を伴ったご功績を残してこられた。

〔授賞式挨拶〕

川井 伸一 氏

（東亜同文書院記念基金会会長・愛知大学学学長）

皆様、おはようございます。川井でございます。この度は第22回東亜同文記念基金会の記念賞を受賞された小崎様に心よりお祝い



申し上げます。申し上げたいと思います。

小崎様は私の理解するところでは、愛知大学の建学の精神を体験された方ではないかと存じております。ご案内の通り愛知大学の建学の精神は、当時の状況を踏まえて世界平和に寄与する人文学問の興隆というのを目的として設立されました。それに合わせて、当時の特殊な目的として三つあるのですが、その一つは国際的な教養と視野を持った人材の育成です。もう一つは、当時中央への偏在に対して地方の文化学問を興隆するというところで豊橋の地を創立の場所に選びまし

た。そういう経緯がございます。小崎様は東亜同文書院第42期生、愛知大学の第1期卒業生でご卒業後も長い間外交官の生活をなされ、その後霞山会でのご活躍、さらには愛知大学に対するご支援をされました。特に東亜同文書院大学記念センターが愛知大学に設立されて以降ご支援をいただいているということでございます。そういう意味で愛知大学の、広くとらえれば三つの建学の精神をそれぞれにおいて体現されている代表的な人材の一人ではないかと考えております。そういう意味でこの受賞は大変ふさわしいと考えます。

私が小崎様と直接お会いしてお話をする機会を持ちましたのはそんなに古くはありませんで、2009年以降のことです。私が学部長に就任し同時に大学の理事を兼ねるようになりまして、その関係から同窓会の各地域の支部総会や懇親会に出る機会がございます。東亜同文書院および神奈川支部総会に出席した機会に小崎様と何度かお会いしてお話をする機会を得ました。以来、今日に至っております。そういう経緯がございます。先ほど申しましたように小崎様は愛知大学の東亜同文書院大学記念センターのほうに多大なご尽力をいただいているということで感謝申し上げます。

後でまた詳しいご説明があるかと思えますけれども、東亜同文書院の大学を一つのモデルとして、その精神を継承するというこ

で現代中国学部が1997年に設立されました。その現地教育と言いますか、特に現地調査研究の学生による発表会に小崎様は毎回現地に赴いて出席され、色々とアドバイスをいただいていることも記憶に新しいことでございます。私が昨年11月16日、丁度学長に就任した翌日でございますが、同窓会の取り組みとして愛知大学創立記念ゴルフコンペが開催されました。その時にご挨拶がてら伺ったのですが、お見かけしたのが小崎様です。聞きますと小崎様は自らプレイをされたということですね。ご高齢のなかとてもご健康で頼もしく、敬服しております。このように小崎様は愛知大学にとつても貴重なかけがいのない存在でいらっしゃいます。特にご活躍の幅の広さ、行動力、それを裏付けるご意志の強さをお持ちであるというのが私の率直な印象でございます。

この度はこういうことで記念賞を受賞されたことを改めて御祝い申し上げますと共に、今後も引き続き東亜同文書院大学の歴史の記録にご貢献いただければと願っておりますのでどうぞよろしくお願い申し上げます。以上をもちまして私の挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございます。

〔記念賞祝辞〕

池田 維 氏(霞山会理事長)

皆さん、おはようございます。ただ今ご紹介に預かりました霞山会の池田と申します。この度は小崎様、記念賞を受賞されました心からお喜びを申し上げます。

釈迦に説法でありますけれども、霞山会、東亜同文書院、愛知大学というのは歴史的にも非常に強い絆で結ばれてきた関係にございます。私自身も霞山会の理事長になって去年の11月、中国、台湾の関係機関の人たちへの挨拶というのを兼ねまして、一週間をかけて北京、上海、台湾をぐるりと回ってまいりました。上海へ行きましたときに交通大学を訪れ、黄震副学長とも会うことができましたが、この交通大学というのはまさに東



東亜同文書院の元々あった場所だということ
を聞いておりましたので、大変感慨深いもの
を感じました。

小崎様につきましては、外務省の私の先輩
でありまして、東亜同文書院大学、愛知大学
ご卒業後に外務省に入省されまして、モンゴ
ル大使、ルーマニア大使等をされ、外交面で
大変ご活躍になりました。その後霞山会にお
入りになられて、霞山会の理事、常任理事顧
問というかたちで、約22年間の長きにわたり
ましてお仕事をされました。そしてその中で
も日本と中国との交流事業、特に日中間の学
生交流の事業に多大な貢献をされました。そ
ういう意味から言いますと、本日の受賞とい
うのはまさに小崎大使の業績にふさわしい
賞であるというように考えております。

日中関係を振り返ってみますと必ずしも
いい時期だけではないと思います。色々な起伏
がありますし、これからもまたいくつかの起
伏を経ながら私たちは仕事をしていくこと
になると思います。小崎様は一貫して日本と
中国の教育事業、特に文化交流事業に貢献さ
れました。先ほど学長からも紹介がありま
したように、愛知大学の学生たちが中国を訪
問して発表会に参加するというような時には、
ご自身も参加され現地を訪問されている
ということでもあります。これからも引き続き
ご健康でご活躍されますようお願いを申し
上げて、私のご挨拶にかえたいと思えます。
どうもありがとうございます。

〔記念賞推薦の辞〕

佐藤 元彦 氏

(東亜同文書院記念基金会前会長・
愛知大学前学長)

こんにちには。今愛知大学のほうからもござ
いましたけれども、今回の推薦に際しまして
推薦文をまとめよというご指示がございま
したので、これから読み上げさせていただきます
ますけれど、正直申し上げて最初依頼があり
ましたときははずいぶんと逡巡を致しまし
た。それは申し上げるまでもないと思いま
す。日頃尊敬をさせていただいている小崎先生が
受賞されるという。それを私が本当に書ける
んだろうかという思いが非常に強うござい
ました。しばらく回答を保留しておりました



けれど、改めて考えてみまして、その尊敬の
念を素直に推薦文に表現してみたい。そうい
うことで今回まとめさせていただいた次第
でございます。それではほぼ読み上げるとい
うかたちで、推薦文を紹介したいと思います。
東亜同文書院大学の第42期生であり、愛知
大学旧制の第1期生でもある小崎昌業氏は
これまでの生涯をかけて東亜同文書院大学、
そして愛知大学の発展のためにご尽力され、
その足跡は今回の東亜同文会記念賞受賞に
十二分に値する、否、受賞は遅きに失したと
申し上げても何人もこうすることはできな
いであろうと。小崎氏のご功績は多岐にわた
って、しかもいずれも深みを極めており、簡
単にはまとめられませんけれども、今回の受
賞に際しまして、三つのことを申し述べさせ
ていただきたいと思います。

一つは東亜同文書院大学、そして愛知大学
をご卒業後に外務省に入省されてからの外
交官としてのご活躍でございます。これにつ
きましては、川井会長、そして池田理事長か
らもご紹介がございましたけれども、カナダ
等でのご在勤の後、在シンガポール大使館公
使、在ポーランド大使館公使などを歴任され、
特命全権大使としてモンゴル、及びルーマニ
アにてご活躍をされました。そのご功績は燦
然と輝き続けております。愛知大学のその後
の卒業生や現在の学生にとって大きな目標
になり続けてきたという点に、心から敬意を
表したいと思えます。実は私が学長に在任中、

何度となく小崎先生から新制愛知大学卒の外交官を出してほしいということを言われてまいりまして、大変申し訳ないですが、私の任期中には実現できませんでしたので、誠に勝手ながら、川井学長、そして今日は事務方の各務事務局長もお出でになつておりますので、一方的にその任務を託させていただきますたい、というふうに思います。

それから第二でございますけれども、ご自身が教育を受けられた母校、特に東亜同文書院大学をこよなく愛し、母校愛とはどのようなものかを身をもって社会に広く示し続けられたことも尊敬に値します。この点が集約して表れていると申し上げたいのは、東亜同文書の歴史の取りまとめに奔走されたという点でございます。ご案内の通り、平成15年に財団法人霞山会から刊行されました『東亜同文会史・昭和編』の刊行に大きな足跡を残されました。この書の編集責任者としての労を取られたご功績は、今後末永く人々から顕彰され続けるであろうというふうに考えております。「東亜同文会の昭和初期の活動は様々な誤解や批判が向けられる中で：日中間の真の提携に努力する活動があった。」この表現は、今申し上げました書物の後書きに小崎先生が書かれているわけでございませぬが、そこから引用させていただきました。それにも関わらず人々に知られてこなかったということがまず触れなくてはいけないことではないかと思えます。この前書に相当

するのが『東亜同文会史』。これは昭和63年に同じく霞山会から刊行されておりまして、れど。その書が明治、大正編に事実上なつていたという一つの理由は、これも小崎先生のお言葉でございますが、戦争と敗戦という異常な状況にあつたため、資料には散逸、消失しているものが多く、誤解や批判も相まってそうせざるを得なかつたというふうに了解されるわけでございますが、そうした制約や困難をあえて乗り越えようとして昭和編の取りまとめに渾身の力を込められたことは、よく後世に知られ続けられるべきであろうというふうに考えます。このことに関しまして、愛知大学名誉教授の藤田佳久氏がその著『日中に懸ける』において、昭和期のことではないが新たに収録された資料によって同書が刊行されていなければ東亜同文会設立時にその綱領に目的として記載された「支那を保全す」の文言を友好互いに助け合うという意味ではなくて、下に見るという意味合いがあるのを削除すべきであるという提案が根津一氏よりなされまして、東亜同文会で了承されていた事実も明らかにならなかつた、というふうに指摘しておられます。この点はこの機会にも改めて触れさせていただきたいと思えます。更に、東亜同文会の後身ともいえる財団法人霞山会を理事として、これは先ほども会長さんから紹介がありましたけれど、理事として11年。内9年は常任理事。顧問として12年のいずれも長きにわたって

支えられてきた点も付言をさせていただきたいと思えます。そして、第三は、愛知大学を東亜同文書院、東亜同文書院大学と結びつけ、愛知大学にそのあるべき姿を示し続けてこられたという点であります。愛知大学に東亜同文書院大学記念センターが設立されたのは平成5年でありませぬ。設立直後にそれを記念するかたちで発刊されたブックレット、そこに小崎先生の論考「愛知大学の原点は東亜同文書院大学」と。そして副題として「その建学の精神の継承と発展」という、そういう論考が載せられております。これは、元々は豊橋会場での第47回愛知大学入学式での記念講演の記録でございますけれども、そこにおきまして小崎先生は愛知大学創設の過程を東亜同文書院大学との関係において書き始め、そして最後の提言を「皆さんは日本のみならず国際社会に貢献できる人となつてほしいのであります。愛知大学はそのような人材を育てる大学だと思えます。ご検討を祈ります。」と締めくくっておられます。愛知大学の今日の重点政策、重点施策の一つはグローバル人材の養成にあるということも皆さんご存知の通りでございます。したがって、これも小崎先生が長年にわたつてそのことを私たちに説き続けてきたからだというふうに私は考えております。この点につきまして、更に付言をさせていただきますと、小崎先生は愛知大学の監事を平成7年11月から7年半にわた

つて務められ、大学の発展に大きく寄与されたわけでありませけれども、東亜同文書院大学時代の現地に根差した教育というDNAを背景にして、愛知大学現代中国学部により平成9年から毎年実施をされております現地研究調査、正確に言いますとこの科目名は何度か変更になるという変遷を辿っておりますけれども、そちらの現地研究調査の最終報告会には必ず出席をされ学生を指導いただいたてられました。私も実は今年度の重慶での最終報告会には顔を出させていたで、久しぶりに現地調査がどうなっているのか確認する意味を込めて出席をさせていただいたのですけれど、現地でお会いしてびっくりしました。と申しますのも、成田空港に向かわれていた際に渋滞に巻き込まれたそう、当初予定をしていた飛行機にお乗りになれなかったというふうに聞きました。しかし、成田空港に着いてからその後代わりの便の予約を自ら手配をされて、それで最終的にはスケジュールに間に合うかたちで重慶に着かれて報告会に出席をされたということとを聞いております。94歳ですよね。とても凄いなというふうに私思っています、その点も私自身の記憶に残っておりますし、さすが小崎先生だなというのを、そうしたご対応を聞いて改めて感じた次第です。それから東亜同文書院大学記念センター主催によりまして海外を含めて各地でこの間14回にわたって開催をされてきました「東亜同文書院大学

から愛知大学へ」の講演会、展示会にも必ずといってよいほど足を運んで来られました。このように、まさに実践の人であるということに重ねて敬意を表しまして、推薦の言葉とさせていただきたいと思えます。どうも大変お粗末な推薦の言葉で申し訳ありません。

〔受賞挨拶〕

小崎 昌業 氏

皆さん朝早くから私ごとき者の授賞式にご参加いただきまして誠にありがとうございます。私はこの受賞のお話を伺った時に自分のような者がどうして受賞するんだろう、受賞に値する仕事は何もやってないのにと思った次第でございます。でも皆さんから強いらさういふご希望をよせられて有難くいた



だくことにしました。本当に皆さんのお力添えで今日の私ができあがったことを厚く御礼申し上げます。

東亜同文書院大学と愛知大学のことについて申し上げますといくら時間があっても足りません。本当に歴史と共に私は生きてきたと考えている次第でございます。元を溯れば中国山東半島の青島で1922年に生まれたことでした。その青島で多くの在留邦人と共に日本近現代史の嵐の中で育つて参りました。そこでは蒋介石の北伐軍、満州事変、盧溝橋事件等に遭いましたが、その中で最も印象に残ったことは東亜同文書院大学の予科及び学部の生活のことです。戦塵の続く日々でしたが、その中で最も楽しかった青春の日々は、書院のあつた校内生活とそれを許した上海の環境でした。やがて大東亜戦争が始まり、我々も学徒動員の一員となります。その大戦も終わり、苦しい戦後が続きます。愛知大学の第1期生を経て、外交官試験の難関を突破し、1951年外務省に入り、全国各地で勤務します。

詳細は中華民国(台湾)、インド(2回)、カナダ、シンガポール、ポーランド、モンゴル(大使)、ルーマニア(大使)、通産省(日米繊維交渉)等であります。また外務省退職後は、霞山会、愛知大学、東亜同文書院等であります。そして命の続く限り、これら諸機関のために尽くしたいと思っておりますので、どうぞ宜しくご支援の程お願いいたします。

東亜同文書院記念基金会 記念賞・功労賞・奨励賞のこれまでの受賞者

<p>第1回 平5(1993)年度 記念賞</p> <p>記念賞</p> <p>記念賞</p>	<p>平成5(1993)年11月5日 上海交通大学 中日科技研究会(翁史烈(当時の上海交通大学学長)が会長)</p> <p>科学技術及び教育に関する日本の資料を中国の学生向けに刊行するなど日本事情を中国に紹介する活動を行っている。(東亜同文書院大学45期専門部卒業生吉川信夫氏は私財を投じて同会を支援した。)</p> <p>谷光隆氏(元愛知大学教授) 大旅行調査を研究 大運河調査報告書を刊行。</p> <p>菅野俊作氏(東北大学名誉教授 41期) 中国人留学生を支援。</p>
<p>第2回 平6(1994)年度 記念賞</p> <p>記念賞</p> <p>記念賞</p> <p>記念賞</p>	<p>平成6(1994)年9月16日 林文月氏(台湾大学名誉教授) 源氏物語他を中国語に翻訳刊行。</p> <p>栗田尚弥氏(埼玉大学講師) 「東亜同文書院 日中を架けんとした男たち」を刊行。</p> <p>白川正雄氏(42期) 戦後スマトラに永住し戦火で消失したモスクを再建。</p> <p>村上和夫氏(長野県中国文化研究会副会長) 中国古代瓦当文様の研究を刊行。</p>
<p>第3回 平7(1995)年度 記念賞</p>	<p>平成7(1995)年9月13日 藤田佳久氏(愛知大学教授) 大旅行調査報告書を解説し「中国を歩く」等を刊行。</p>
<p>第4回 平8(1996)年度 記念賞</p> <p>記念賞</p>	<p>平成8(1996)年9月6日 ダグラス・レイノルズ氏(ジョージア州立大学歴史学部副教授(注:肩書きは受賞当時))</p> <p>東亜同文書院の大旅行調査を研究し、それが戦後米国で発展した地域研究(Area studies)よりも古い歴史を持つ優れたものであることを検証し「地域研究の知られざる起源 日本の東亜同文書院」を刊行して広く世に紹介した。</p> <p>陳弘氏(44期) 日中要人の会談の通訳 人民日報東京特派員として友好促進に貢献。</p>
<p>第5回 平9(1997)年度 記念賞</p>	<p>平成9(1997)年10月7日 遠山正瑛氏(鳥取大学名誉教授) 日本砂漠緑化実践協会を設立ボランティアを指導し内蒙古砂漠に植林。</p>
<p>第6回 平10(1998)年度 研究奨励賞</p> <p>研究奨励賞</p>	<p>平成10(1998)年9月24日 薄井由氏(上海復旦大学修士課程) 「東亜同文書院大旅行初歩研究」を中国で出版し書院の業績を中国で紹介。</p> <p>水谷尚子氏(日本女子大博士課程) 書院中華学生部を研究し論文「東亜同文書院に学んだ中国人」で同学生部の業績を紹介。</p>
<p>第7回 平11(1999)年度 記念賞</p> <p>研究奨励賞</p>	<p>平成11(1999)年9月28日 (テキ)新氏(上海復旦大学大学院修士課程修了 慶應義塾大学大学院法学研究科後期博士課程) 東亜同文化の日中近代史における足跡を研究、再評価する論文を発表。</p> <p>劉永誌氏(愛知大学大学院文学研究科博士後期修士課程 博士学位取得) タクラマカン砂漠の困難な現地調査を行い、その日本語論文は辺境の地誌学的研究として高く評価された。</p>

第8回 平12(2000)年度	平成12(2000)年9月29日 名古屋テレビ「青春の中国」取材班 東亜同文書院の「日中の架け橋を」という理想に生きた書院生の青春とそれを現代に受け継ぐ愛大学生の姿を生き生きとテレビで紹介。
第9回 平14(2002)年度	平成14(2002)年9月26日 西所正道氏 「上海東亜同文書院風雲録」を刊行。卒業生たちの足跡を追うことにより、東亜同文書院の建学の精神が世紀を越えて現代に生き続ける姿を広く世に紹介。
第10回 平15(2003)年度 記念賞	平成15(2003)年9月24日 工藤俊一氏 「北京大学超エリートたちの日本論」を刊行。各方面から高い評価を得た。
第11回 平16(2004)年度 記念賞	平成16(2004)年9月29日 今泉潤太郎氏(愛知大学名誉教授) 「愛知大学『中日大辞典』」の編纂に長年献身的に力を注ぎ、同辞典の内外における高い評価の形成に多大の寄与をした。
第12回 平17(2005)年度 記念賞	平成17(2005)年10月7日 大森和夫氏(国際交流研究所長)・弘子さん夫妻 日本語教材を中国の大学に寄贈するなど日中文化交流活動を続けた。
第13回 平18(2006)年度 記念賞 奨励賞	平成18(2006)年12月8日 テレビ宮崎 強制連行で過酷な労働を強いられた中国人労働者を親身にかばった勇気ある日本の青年の精神と行動力のルーツを辿るヒューマンドキュメンタリーを制作放送した。 成瀬さよ子氏(愛知大学豊橋図書館司書) 内外のぼうだいな資料を収集整理し貴重な「東亜同文書院関係目録」を作成刊行した。
第14回 平19(2007)年度 記念賞	平成20(2008)年1月29日 浅川義基氏 北京国際元老テニス大会に連続20年間出場する中で、会の推進的役割を果たし、日中友好と国際親善のために尽力した。
第15回 平20(2008)年度 記念賞	平成21(2009)年1月30日 工藤美代子氏 著書「われ巢鴨に出頭せず」において文麿公の行動を論理的に検証したが、これは東京裁判史観を根底から覆す程の功績があった。
第16回 平21(2009)年度 記念賞	平成22(2010)年1月27日 葉敦平氏 東亜同文書院の上海交通大学キャンパスの占用、両校の近隣同士の友好関係などを、史実に基づき組織的に研究し、「資料選集」を編集。
第17回 平22(2010)年度 記念賞 記念賞	平成23年(2011)年1月26日 小坂文乃氏 著書「革命をプロデュースした日本人」で、孫文に対し多大の援助を与えながら「一切口外シテハナラズ」として革命運動の隠れた援助者であった梅屋庄吉の生涯を明らかにした。 中日大辞典編纂所 鈴木擇郎先生らにより計画された東亜同文書院中国語教育のシンボルともいえるべき辞典編纂に長年取り組み中日大辞典第三版を刊行。

第18回 平23(2011)年度 功労賞	平成24年(2012)年1月24日 藤田佳久氏 オープン・リサーチ・センター事業実施。東京・中日・北陸中日新聞連載「東亜同文書院の群像」執筆。
奨励賞	武井義和氏 「孫文を支えた日本人」出版。「中国における東亜同文書院の『資料選集』」翻訳。
第19回 平24(2012)年度 奨励賞	平成25年(2013)年1月25日 保坂治朗氏 それまで東京同文書院の実態が幻的存在であったのを実像化した点で先駆的であり、当記念センターの書院研究で当初からなかなかアプローチ出来なかった空白部分を埋め、時代背景にも言及されつつ東亜同文書院のある種原点を解明された。
奨励賞	有森茂生氏 東亜同文書院関係の図書、資料文書、写真、レコードなどを2008年以來ほぼ毎年のように寄贈され、愛知大学東亜同文書院大学記念センターの展示や研究に貢献された。
第20回 平25(2013)年度 記念賞	平成26年(2014)年1月28日 岡部達味氏(東京都立大学名誉教授、元霞山会理事) 中国政治・中国外交を専門とした学術研究に加え、メディアを通じて我が国論壇としてリードする役割を果たされた。1997・2001年には日中友好21世紀委員会日本側座長を務められ、日中間の相互理解促進に大きく寄与された。
功労賞	平井誠二氏(公益財団法人大倉精神文化研究所研究部長) 東亜同文書院卒3期生大倉(旧姓江原)邦彦氏が戦前設立した大倉精神文化研究所の研究員として、同研究所の研究活動を企画運営されている。東亜同文書院関係にも強い関心を持ち、多くの史資料収集を行なうとともに、機関誌『大倉山論集』に多くの研究者を動員して、その成果を集積されている。
第21回 平26(2014)年度 記念賞	平成27年(2015)年1月27日 北川文章氏(霞山会顧問、霞山会元理事長、山一証券元副社長) 日中間の文化交流事業、留学生交流事業、日中間の相互理解の推進に尽力されたことにより、中国上海交通大学及び浙江大学より顧問教授に任命されるとともに、揚州大学より名誉教授の称号を授与された。霞山会理事長就任時には愛知大学理事も兼任され、史実に基づいた「上海交通大学と財団法人霞山会の歴史関係に関する共同研究」に尽力されるなど、国際研究交流事業推進に多大な貢献をなされた。
功労賞	仁木 賢司氏(ミシガン大学上級ライブラリアン) 東亜同文書院関係の文献資料を精力的に収集し、ミシガン大学等の研究者へその提供および指導をされ、アメリカにおける東亜同文書院研究のベースをつくられた。2009年には「ミシガン大学の東亜同文書院およびアジア系文献史資料のグーグル化」、2014年には「書院との出会いと史資料」と題して愛知大学で講演され、東亜同文書院大学記念センター発展への期待を力説された。
第22回 平27(2015)年度 記念賞	平成28年(2016)年1月22日 小崎昌業氏(東亜同文書院大学第42期、愛知大学第1期、元在モンゴル特命全権大使、元在ルーマニア特命全権大使) 東亜同文書院大学の第42期生並びに愛知大学(旧制)の第1期生として、歴史的に関わりが深いこれら2つの大学の発展のために、一般財団法人霞山会を理事、また顧問として、同時に、学校法人愛知大学の監事も務められるなど、生涯を懸けてご尽力されてこられた。 また、外交官としてのご活躍、東亜同文会との昭和期の諸活動の取りまとめ、愛知大学に引き継がれた現地主義教育へのご指導など、実質を伴ったご功績を残してこられた。

東亜同文書院記念基金特別奨励賞 東亜同文書院記念基金栄誉賞 授与

東亜同文書院記念基金会では、書院への理解を深め、伝統を引き継いでいくことを期待して本学学生へ2種類の表彰しております。1999年度より「東亜同文書院記念基金栄誉賞」を設け、学位記授与式において、人物・学業成績が優れた者を表彰しています。

また、2013年度より「東亜同文書院記念基金特別奨励賞」を設け、入学式において入学試験の成績が最も優秀な入学者に対して、同賞を贈っております。

【2015年度受賞者】

東亜同文書院記念基金 特別奨励賞

経営学部 不破 雪乃
ふわ ゆきの

東亜同文書院記念基金 栄誉賞

経営学部 張 哈宇
ちよう かんう



【基金役員名簿】

会長

川井 伸一

(愛知大学理事長・愛大学長)

副会長

池田 維

(霞山会理事長)

理事

藤田 佳久

(愛知大学名誉教授)

星 博人

(霞山会常任理事)

三好 章

(愛知大学東亜同文書院大学

記念センター長)

各務 一徳

(愛知大学常務理事)

監事

岡村 幹吉

(岡村会計事務所)

書院の皆さん、 今に思いを語る

授賞式の後、懇親会が催され、書院卒業生や関係者の方からお言葉をいただきました。

高遠 41期の高遠です。乾杯の前に、私と一緒に東亜同文書院記念基金会というものを立ち上げた41期の高瀬恒一君が、この1月11日に亡くなりました。去年から入院していました。終戦で同文書院が無くなっちゃったが、同窓会(滬友会)はありました。そこで記念基金というものを、お金を集めて作ろうと高遠君たちと始めました。何をするかは後から決めようと運動を始め、案内を出したら立ちどころに会員、未亡人、兄弟、そういう人たちからお金が集まった。5、6千万円集まった。ところが滬友会、霞山会などからは、お前たちはお金を集めて何をするんだと当時の会長が最初反対された。そこで運営委員会を立ち上げ、検討した結果、会員が元気な内は運営し、会員が居なくなった後はどこに預けようかと。預けるなら愛知大学にとお願いした、当時の愛大の中にも色んな意見があったようですが、その時の牧野学長さんが決断され、引き受けて記念基金を作ろうと。滬友会の会長が変わった途端に賛成。滬友会から何百万かのお金が入り、霞山会と愛知大



学からも多額の出捐があり、現在の運営があるわけです。そして愛知大学東亜同文書院大学記念センターになり、我々書院生の意志が立派に継承されていることをお話しして、高瀬君の冥福に込めたいと思います。

田辺 元文部科学事務次官で、現在、明治大学教授をなされております清水潔様でございます。清水様、お願い申し上げます。

清水 皆さん、初めまして。ご紹介頂きました清水と申します。今日は東亜同文書院が伝説と歴史的存在として東亜同文書院を記念する基金の授与式において、小崎先輩をはじめみなさまにお目にかかれるのは何とも光栄でございます。

役人生活の内、十数年間を高等教育畑で仕事をさせて頂きました。高等教育システムの



戦前の専門学校と大学は、先ほどお話を伺いながら、ある意味で良き伝統そのものが現われていると思います。大学のカリキュラムで生かされているのであろうか、一つの大きなエポックメーカーキングな時代の資料を集積したものがあるであろうか、色んな考えなきやならないことが沢山あるように思います。今、現実の課題の中で新しい人文社会科学のあり方が厳しく問われている。大学の教員だけでなく、課題に関わる多くの関係者がそれを総合化してその解決に取り組んでいく。こんな動きも今始まっているわけです。そういう意味での先駆的な関係者の連携を見るような思いをしながらずっと東亜同文書院がどんな活動をされたか私には幻のようでありました。

山口大学には、満鉄の調査部時代の色んな資料があったり、そこで研究者たちと色んな

ことを話しながら、経済、社会史、その他含めて色々なことの可能性、先輩たちの成果が方法を含めて今に生かされているのかと色々なことを考えさせられたりもします。

縁あって愛知大学のお手伝いを多少なりともさせていただくことになりましたが、皆様、今後共またよろしくお願い致します。

田辺 ありがとうございます。実は清水様には、このようなかたちのご縁がありました。現在、愛知大学理事長顧問として愛知大学にご協力をいただいております。皆様よろしくお願ひ致します。

続きまして、愛知大学の創立者、そして東亜同文書院の最後の学長であられました本間先生の生誕地、山形県川西町から副町長の山口様にお越しいただきましたので、ご挨拶をいただきたいと思います。山口様、お願ひ致します。

山口 皆様、初めまして。山形県川西町からやってまいりました副町長の山口です。本日は授賞式という、このような晴れがましい席にお邪魔して大変光栄に思っております。小崎先生には初めてお目にかかりますが、本日は誠におめでとございます。

ただ今ご紹介いただきましたが、本間喜一先生のお生まれは当時玉庭村、現在は合併して川西町となっております。旧玉庭村は旧上杉藩士が多く居住していた所で、多くの素晴

らしい人材を輩出しているところであります。その中でも本間先生は特一級の方であります。私自身も旧玉庭村の生まれで、素晴らしい先輩に恵まれて誇りに思っております。4年ほど東京で学び、本間先生のように広い世界に羽ばたこうと思いましたが、地元に戻って役場に勤め、現在は副町長の任を務めているところであります。

昨今は地方創生の時代ということですが、数あるテーマの中でも一番大切にすべきは人づくりであると思っております。そうした意味で今日の式典の話をお聞きしながら、この東亜同文書院及び愛知大学の連綿とした人を重ねる、人を繋いでいくという思いを強く感じたところであります。今日ここにお邪魔するにあたり、お付き合ひ頂いております。愛知大学と本間先生の匂いがどのよう感じるかと思いつつお邪魔いたしました。そんな匂いを想像以上に感じて

いただいたことを心から喜んでいく次第であります。

近年、愛知大学の皆さんと川西町は交流が深まっているところであります。私の町にも本間先生の胸像をいただいております。今年、先人を顕彰するコーナーを設けながらもつとんど地元においても本間先生を顕彰し、また東亜同文書院及び愛知大学についても、本間先生との関係や歴史等を広く知らしめたいと考えておりますので、どうか皆様にもよろしくお願ひできればと思っております。

山形の地、今年雪がほとんど降っておりません。私今日ブーツを履いてきましたけれども、これは寒さ防止であつて雪防止ではございません。3月には本間先生のご実家も含め「ひなめぐり」のイベントなどに多くの人がお越しいただいております。またこれから本格的な降雪を迎えるものと思われませんが、冬が明けますと春。雪国の春というのは素晴らしい春です。そして秋には町の花ダリヤが日本一の規模のダリヤ園を中心に町中を彩ります。それから川西町は米沢牛の故郷でもあります。子牛生産が主ですが、子牛の半分は本町で生産されております。

ぜひ皆様にもお越しいただき、本間先生の故郷に触れ、ダリヤの花を目で米沢牛を舌で堪能していただければと思います。

どうか今後、皆様と川西町との絆が益々深まりますようお願い申し上げます、一言ご挨拶と



させていただきます。どうもありがとうございます。

田辺 ありがとうございます。それでは、関係者の紹介をさせていただきます。まずはこの会も含めましてともお世話になっております霞山会の皆さんを紹介させていただきます。お名前をお呼びしましたらお立ちいただけますでしょうか。

常任理事の星様、いらつしやいますでしょうか。阿部純一様、よろしくお願ひ致します。それから倉持様、お世話になります。堀田様、ありがとうございます。

続きまして愛知大学関係者を簡単に紹介させていただきます。東亜同文書院大学記念センター長の三好先生。初代センター長で今はフェローである藤田名誉教授。そして、本学創立者本間喜一先生の生誕地山形県川西町出身の文学部加島先生。それから新事務局長の各務事務局長でございます。愛知大学監事の林監事。林監事は本学卒業後文部省にお勤めになられ、そして一橋大学事務局長をなされました。現在は本学常任監事をなされております。よろしくお願ひしたいと思います。それから校友課の会田課長。東亜同文書院大学記念センター担当を致しております豊橋研究支援課小川、センター事務担当の森でございます。そして私、豊橋研究支援課長の田辺でございます。よろしくお願ひ致します。そして、この授賞式も含めまして東亜同文書

院記念基金の監事を引き受けていただいております岡村先生、お世話になっております。予算決算につきましてはお渡ししております基金会ニュースをもちましてご報告とさせていただきます。

先ほど山形県川西町副町長の山口様からご挨拶をいただきましたが、愛知大学では「本間先生を顕彰する会」を毎年7月に川西町で開催しております。昨年は国立国会図書館長の大滝館長と、本学加島先生が記念講演をなされました。愛知大学と川西町との繋がりを深めるかたちで進めていることをお伝え申し上げます。

ここからは、諸先輩方のお話をいただきました。先輩の中島様、マイクをお渡ししバトンタッチをお願ひしたいと思います。よろしくお願ひ申し上げます。



中島 皆さんから拍手をもらおうと何か猿も木から落ちるっていうような感じがします。それでは前半の有意義な会を更に有意義にできるようなかたちにもっていければいいなと思います。

今日の意味は基金会の色々な顕彰ということ、前半は霞山会、同文書院、愛知大学の伝統的なお話に触れました。復習すれば1901年に同文書院が上海にできたこと。その後が日清戦争。それからそのちよつと後が日露戦争。それから1911年には辛亥革命。少し経つともう色んな中国とせわしくなってきた。1920年から30年前後にはソ連のコミンテルンや毛沢東動きだしてくる。そのような中で45年の終戦まで書院生が勉強し、卒業されて小崎さんのように外交だとか商社等、世界的に内外通じて活躍された。それを引き継いだ愛知大学ということで、同文書院に負けないよう一生懸命努力をしております。

その中で中心になるのは記念センター長の三好先生をはじめとしたスタッフ、それからその関係者が今日の会とかこのニュースレターが立派なのが出ましたけども、そういう中で皆さんに紹介をしておるといふことです。そういう面では先ほど高遠さんのお話もありましたけども、色々と愛知大学に対する、あるいは霞山会に対する期待が大きいことが分かります。それに十分愛知大学も応えており、今後も努力するといふふうな観点で



ぜひ一つ先輩方に負けないよう今後を処したいと思います。

それで今日は書院の皆さんも数少なくありませんでしたが、このニュースレター、今日のお話、それに関連したとか、最近基金会とか霞山会とか愛大に対する感想とか希望みたいななそういうものを皆さんからちらほらいただいて、愛知大学の励みにしたいと思いたすので、ぜひ一つこの辺り含んでお願いしたいと思います。順序はどうなるか分かりませんが、そこらあたりご指名というか含みを持たしてありますので、ぜひ一つよろしくお願ひしたいと思います。どなたか同時についておわけにいかないものですから。さっきのお話の特に関連したというようなお話があれば。それでは小崎さんのほうから何かありますか。

小崎 私は東亜同文書院大学の予科2年生の時に、このまま戦争が進めば大旅行に行くチャンスがなくなるだろうと思い、林出学生監に頼み許可を貰って私的大旅行に出かけました。一人で夏休みに、華北・蒙古・満州へ旅行することにし、期間は昭和17年の6月14日から8月初めまででした。

最初に、船で青島へ行きましたが、青島は自分の生まれたところで、思い入れの多いところ。幼稚園、小学校、中学校、青島神社、第一公園、山東路、水族館等々を思い出しながら、海事協会に2泊しました。

青島から夜行列車で済南、德州經由でそこから石徳線に入ると猛烈に暑かった。石家荘に泊まり、翌日夕刻榆次に着く。榆次発、平遥発、夜太原着。24日太原発、夜汾陽着。25日朝汾陽発のバスで物凄い山道を通り、午後離石に着く。夜、警察署長の家で夕飯をご馳走になる。屋根の上にテーブルを広げ、酒とご馳走を煌々たる月光の下で賞味している。と、城壁の外側で時々銃声を聞きました。27日道路が敵軍の爆薬により爆破されたので、太原に帰るに帰れなかった。7月1日やつと橋と道路の修復が終わわり、トラックの助手台に乗せて貰い太原に向かった。汾陽、平遥經由で2日午後太原着。6日北同蒲線により太原発。7日大同駅前朝食。雲崗石窟には驚嘆すべきものあり。8日11時包頭に着く。9日厚和着。10日張家口に着く。大蒙会社の尾

中先輩の世話になる。西礼蘭ノールへの車がある由につき尾中家に泊まる。13日朝5時大雨でトラックの荷台に乗れず旅行を断念する。13日雨の中北京着。棚平先輩の家に泊めて頂く。16日遊覧バスで北海、天壇等を回る。21日北京をあとに急行「大陸」は朝霧の中を走る。

この車中で井上さん夫妻、川久保さん(女性)と知り合いになった。釜山に夜10時頃着いたが、連絡船に乗れない人が前日から千人も留まっているため、我々もここで一泊せざるをえない。私は独りで宿を探すつもりで暗い釜山の街を歩き出したら後から川久保さんが付いて来る。宿がないから、あなたに付いて行くと。何所でもよいから連れて行って欲しいというわけで。やつと小さな宿を見つけたが、空いているのは四畳半の部屋があるだけと言われた。川久保さんはそれでもよいと言うので、一緒に泊まりましたよ。知らない女性と泊まるのは初めてだったので、二人の布団の間にタオルを敷いて、これを越えないようにしようという約束して休みました。

早朝、行列をなして船場へ、大勢の人で危ないところでしたがやつと乗れました。船の最底部で暑いし人は多い。川久保さんは船に弱い様子にて、上甲板にあげて弁当やサイダーを買ってあげた。漸く下関港に着いた。彼女は佐賀県武雄の人。僕は滋賀県。ここで別れました。

ところがその年の秋、上海でばったり川久保さんに会いました。彼女は上海の電話会社に勤めていて、あの時はお父さんが亡くなったので、武雄での葬式に帰りましたが、その後すぐ上海に戻ったという。その日、極東オリンピック大会の切符を買いに行った所で我々は偶然にも再会しました。

以上、私的大旅行と不思議なご縁の思い出に触れてみました。

中島 当時のことをよく鮮明に覚えていらっしやるわけですね。42期の皆さんは正式の大旅行がなかったから、小崎さんは私的に実施されたわけですね。

書院の大旅行については、ここにおいで藤田先生が広く検証しております。何冊もの著作もあり、それらを見て外国の研究者も関心をよせております。

それでは書院が創立される前に、高杉晋作が上海へ行ったことがNHKの大河ドラマの「花燃ゆ」に出ていましたが、昭和19年か高杉晋作をテーマにした映画が書院の構内で撮影されたと、関谷さんから聞きましたので、そのことについて一言触れて頂けませんか。

関谷 関谷でございませう。今NHKの連ドラ「あさが来た」を見ていたら、五代という人が出てきたので、書院当時院子(校庭のこと)でロケがあったことを思い出しました。



時は昭和19年初夏、主役は坂東妻三郎と月形龍之介、題名は「狼煙は上海に揚がる」でした。当時、私はそのロケを間近で見えていました。

物語の主人公は高杉晋作(坂東妻三郎)、維新の暴れん坊として有名な彼の若き頃です。江戸時代の末期、海外視察のため長崎から上海に渡り、その船中で薩摩藩の五代才助(月形龍之介)に会う。

物語は、高杉は政治、五代は経済面から当時の上海の荒廃と中国人を分析し、それは清国が鎖国をして欧米の文明を取り入れなかったことによるものとして、二人の心の中で同時に日本の進むべき道について強い危機感が生まれる、といったものでした。

中島 ありがとうございます。今現場に関谷さんが行って俳優にスカウトされたらその後の人生変わったかもしれないですね。ありがとうございます。今朝のテレビで亡くな

りましたですね。あの辺りの相当事実に近いというふうな設定があるみたいですけども。それと今の地域創生についても非常に考え方とか行動としてはやっぱり似通った点があつて学びたいところが多いんじゃないかというふうに思います。殿岡さん何か一言。

殿岡 関谷さんの話をフォローしますけども、その映画が日本に来たとき、その有楽町の朝日新聞のビルでしたよ。もう見るのに大変でも母と一緒に見に行きました。そうしまして、ふつと瞬間ですよ。グラウンドを阪妻が乗っかって人力車がすつと行くだけの。何べんも見るとすけど、絵に描いたような二階校舎が写りました。大変人気者でした。

関谷 この映画のプリントによると、「この作品は、日本にも中国にもフィルムが現存せず、幻の作品となっていたのだ。それがロシアに保存されており、2001年になって大映が買い戻しを行い日本でも上映可能になった。」とのことですよ。

中島 ありがとうございます。殿岡さんさつきの映画はいつ頃上映されたんですか。

殿岡 父から手紙がきて見ろつて言うんで見たんですから。

中島 私はまだ生まれてなかったんです。

殿岡 小学生だと思いますよ。

中島 ありがとうございます。色々昔のお話で興味は尽きませんけれども。今日は44期の釜井さんがお見えです。「わしは今日は遠慮しとくよ。」と言われましたが、このあいだの池田理事長さんに講演をしていただいた時に、当時の交流の様子を釜井さんからお話しをしていただきました。ここで復習していいかどうかあれですが、ひと言お願いします。

釜井 釜井です。実はこのあいだ同窓会の時に高井さんから招集がかかり、霞山会の理事長に就任された池田さんの紹介をして欲しいと言われましたので、何かお話ができたらと思います。

皆さん新理事長のことをよくご存じじゃないかと思しますので、私の仄聞する池田新理事長のお話をちよつと。

池田さんは姫路の御出身で、成績優秀、東京大学法学部に入られ、37年卒業と同時に、当時、国家公務員上級試験を通ってもなかなか採用されなかった後、外務省に入りました。在外語学研修生で、ワシントンで勤務され、それから香港、北京、ブラジルなど7ヶ国で、大使も合わせてされました。

私が聞いたなか特に有名なのは、一昨年でしたか大爆発があった天津、あの近辺に以前

勝利油田といった油田があるのですけれども。これを中国では隠しておいたのですが、香港在勤中に何か変なものがあるということに気が付いて人工衛星を引っ張ってきてその写真を撮って、こんなでっかい油田が北京のごく近くに出来たということを確認発表したそうです。公式の発表はしていないですけれども。何かそんなことをやっているのを米軍も知らなかった。

それからしばらく後、バンコク駐在の公使のときはカンボジアの平和に大分汗を流し平和にこぎつけたというようなことをやられたそうです。

もう一つ、オランダのアムステルダムの大使の時、赴任した頃は在郷軍人会とかが、日本の天皇が来たら、ああしてやる、こうしてやるという、例えば卵をぶつけるとか、あるいは火炎瓶をぶつけるなんていう元軍人も



いたそうですけれども、そういう不穏な空気を駐在大使として無事丸く収めて天皇陛下の御訪問が、何事もなく終わったというようなことも聞いております。

池田霞山会理事長の功績はその他多くありますが、特に印象的なことは、この三つではないかと思っております。勿論最後の亜東関係協会の理事長の時も対台湾関係で、民進党がヘマをやったときなども色々汗を流された。李登輝元総統訪日ということでもだいぶ奔走されたというようなことを伺っております。

簡単ながら御紹介しました。

中島 ありがとうございます。釜井さんはお人柄的に控えめのお話でしたが、新聞社でご活躍でした。

オランダの在郷軍人のお話がありました。が、インドネシアはオランダの植民地でした。当時日本が侵攻し戦闘になり、敗戦の時再びオランダが侵攻し、インドネシアと戦うことになりました。日本の統治下にあった時、インドネシアの青年に軍事訓練をし、残留日本人が共にオランダ軍と戦い独立を勝ち得たことは日本の貢献でした。42期の白川正雄氏もその一人で、インドネシアに残り、医学の道で貢献したと聞いています。最近になって日本の独立への貢献が教科書に載っているとも聞いています。



殿岡 同文書院の校庭で映画が撮られたって
 言いましたでしょう。愛大でも撮っているん
 ですよ『二等兵物語』。ずいぶん忘れられち
 やいましてけれども。あれはそのまま校舎い
 じれないからそのまま使っていましたから。
 本当にアチャコや何か皆来てそれで学生が
 アルバイトで階段の上から蹴っ飛ばされて
 落ちると、五百円余計つくのです。ゲートル
 なのですけども、戦後少し経ちましたからや
 っぱり気も緩んだのか、学生さんたち巻いて
 行進して走るとズルズルとこう落ちるそう
 で、あれが困ったと言っている。それで大学
 の近辺をこう駆け足で通るのですけども、そ
 れも88ぐらいの父のガールフレンドなん
 ですが、タバコ屋のおばあちゃんがまた戦争始
 まって孫さとりられるんだなって心配したと
 言っておりました。映画はだいたい撮ったらし
 いのですよ。朝ドラもあそこで撮りましたよ
 ね。そんなのがあります。

中島 そういう面でも愛知大学が有名になっ
 ております。

それから今日は根津一先生の末裔、ご親戚
 の松下ご夫妻に来ていただいております。根
 津先生の命日は2月でしたが、東京の方では
 4月上旬に桜花忌として鶴見の総持寺で墓
 参をしております。それから秋には荒尾精先
 生の墓参を谷中の全生庵でしております。今
 年の10月30日は、根津先生の没後120周
 年になります。これには大学、同窓会、書院
 生ともに集い墓参法要が叶えばと思ってお
 ります。

今日の資料に2月21日の記念センターの
 シンポジウムのチラシが入っています。若手
 研究者の同文書院の顕彰がテーマになって
 います。

書院の場合は、全寮制でした。その中に院
 歌を始め多くの寮歌が生まれています。寮歌
 委員長の中子さんが見えですから、中子さ
 んに指揮をとっていただいて、皆さんご一緒
 に歌いたいと思います。続いて時間があれば
 愛知大学の逍遙歌、それから学生歌など、歌
 っていたきたいと思えます。それでは皆さ
 んステージの方へお願いします。

中子 同文書院の44期中子です。戦時中の
 昭和18年に入学し、その後波瀾の人生を送り、
 今の存命は、30人位になりました。関東では、
 毎月の第4木曜日に会合をやっています。今
 が、今は42期に合流して第3金曜に、霞山会

館1階の阿里城に集っています。ビールを飲
 みながら、楽しく語り合っています。

寮歌祭のことですが、千葉寮歌祭は昨年10
 月で30回を重ね、幕を閉じました。中央寮歌
 祭は毎年8月に行い、私も出ます、皆さん応
 援してください。

それでは院歌から歌います。続いて、長江
 の水、嵐吹け吹け、を。

【皆で歌う】

中島 ありがとうございます。まだ沢山寮



歌はあります。交通大学には今も昔の寮舎は残っています。それでは小川さん、愛大の寮歌の方、お願いします。

小川 寮歌を歌う前に一言申し上げます。昨年7月の日経新聞・私の履歴書で浅丘ルリ子が一か月にわたって履歴を書きました。その中で、こう書かれています。「私は昭和15年7月2日、新京で生まれ、75歳です。私の父・浅井源次郎は東亜同文書院を卒業後、中央大学から大蔵省に入り、満州国の高級官吏、經濟部大臣秘書官などとして忙しく働いていました」と。この「履歴書」の中で、ルリ子は一日目、二日目、三日目とずっと源次郎のことを書いています。よほど父・源次郎が好きだったのか誇りに思っていたようでした。本人も同文書院を卒業したことを誇りに思っていたと思います。

源次郎は19期ですから大正8年入学、同11年卒ですね。ルリ子に関する情報で満州映画の理事長・甘粕正彦と浅井源次郎との間で次のような会話があったと書いています。「ところで浅井君、信子(ルリ子の本名)ちゃんは元気ですか、僕は信子ちゃんの瞳を見たとき、この世にこんなきれいな瞳をもった少女がいるのか、とびっくりしました。信子ちゃんはきつととてつもない美人になるはずです。その時はぜひ、満州映画に入れてやってください。私が間違いない育てます」と。私は浅井源次郎さんに強い印象をもつて

いるのですが、同時に浅丘ルリ子にも非常に好感をもちました。たまたま、ルリ子の実家が私と同じ調布にありまして、そこに4人姉妹がいらして、ルリ子は次女で長女は亡くなり、三女と四女はご存命なので、いつかぜひ、お目にかかりたいと思っています。

このような物語が昨年の日経新聞に掲載されたことをご紹介申し上げて、今から愛知大学の逍遙歌を歌います。時間がありませんので、1番と6番にします。それでは愛知大学逍遙歌！

【皆で歌う】

中島 ありがとうございます。これで私の担当は終わって田辺課長さんにバトンをします。よろしくお願いします。

田辺 皆様、お疲れ様でございました。お立ちになられた方は一度お座りいただきやすいでしょうか。寮歌のほうも盛り上がりました。

最後に、本日皆様に基金会ニュースをお配りしました。この基金会ニュース、一昨年から記念センターで印刷を担当させていただいております。これまで本当にお世話になっております皆様へ、恩返しができる構成にしたいと検討しながら対応させていただいております。前半に授賞式でのご挨拶等々、昨年の受賞者北川様です。仁木様のお話も掲載しております。また、東亜同文書院記念基金

特別奨励賞と記念基金栄誉賞について10ページに紹介させていただいております。記念基金特別奨励賞は、一般入試での合格者の中で一番成績の良かった入学生に入学式で表彰しています。そして記念基金栄誉賞は、大学での学業成績が一番良かった卒業生に表彰しております。そして11ページからは、中島様の司会のもと、皆様からいただいたお言葉をまとめさせていただきました。皆様からいただいた思いを含め、過去からの良い流れに繋げていけたらなという思いでございます。そして中島様から送っていただいた写真等々も掲載しております。25ページには、今日も出席なされている有森さんから、愛知大学東亜同文書院記念センターのぼりをこのように作っていただきました。そして26ページから東亜同文書院記念センター事業の1年間を簡単にまとめさせていただきます。より紹介いただきます。

三好 東亜同文書院大学記念センター長の三好と申します。よろしくお願致します。基金会ニュースの26ページから紹介いたします。岐阜、広島での展示会講演会です。28ページには大旅行の研究の一環であるシンポジウム「書院生アジアを行く」です。東亜同文書院の中国研究を現代的にと行うこと、11月に同文書院の初期の研究がどういう意味を持つのかということを行いました。



それから年が明けまして、研究グループ「同文書院と日中関係の再検討」がワークショップを行いました。また出版物に関しまして、すでにご承知の方も多いかと思えますが“愛大公館”と称する建物がございます。元は陸軍15師団長官舎でありましたけれども本間先生ほか大学関係者の宿舎でもありました。建物そのものが現存しておりますこと、築100年のエピソード等をまとめた本を出版しました。

その上で今年度のあらましをお話させていただきます。展示会、講演会に關しましては昨年9月に、同文書院の教授をなされ、愛知大学第3代学長を歴任された小岩井先生の生誕地である長野県松本にて開催しました。それからシンポジウム研究活動等に関しましては昨年の1月に行いました「同文書院と日中関係のシンポジウム」の追加のものが12月に行われました。そして基金会ニュースにはさんでおりますけれども、2月21日に「海

外から大学引き揚げをめぐる問題とその位相」と称しますシンポジウムを豊橋で行います。豊橋で愛知大学を引き受けて下さった方々の話、勿論入っていった豊橋に帰郷を定めることになった経緯、さらには同じ様な時期に社会変動のあった中国ではどうだったのかということも比較研究する方法で考えております。

このほか刊行物に關しましては、同文書院の初期の教授でありました根岸侑氏の著作集の刊行も始まり、来年4月過ぎには全三巻で完結する予定です。またそれ以外でも初期の書院の関係者の写真集であるとか、あるいは資料集等々の発行を準備しております。また来年度は、文科省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業の最終年度にあたりまして、各研究グループとも、研究成果の出版を予定している、と各グループ長から話を伺っております。

また国際交流の点におきましても、書院の客員研究員として海外の研究者、とりわけ中国の方が結構いらつしやいまして、この夏には内モンゴルになります。フフホトに何名かおりますので、そこに集まっていたらき会議を開こうと考えております。

また、私は同文書院の教育面のやり方を継承しております現代中国学部にも所属しておりますが、現代中国学部は今年ちょうど20年を迎えます。それで20周年の色々なことを考えておりますので卒業生の方々、愛知大学だ

けではなくもっと大先輩の同文書院の方々のご支援を宜しくお願い致します。以上で私の報告とさせていただきます。

田辺 ありがとうございます。少しだけ補足をさせていただきます。このニュースの32ページ以降でございますが、特別掲載というかたちで記載をいたしました。これは広島での展示会、講演会にて、第19回東亜同文書院記念基金奨励賞を受賞された有森様と藤田先生とのお二方の掛け合い講演でございます。そちらもお読みいただきましてご理解を深めていただけたらと思います。

最後の裏面をご覧ください。写真や作品を入れ換えておりますが、大学記念館です。これは陸軍第15師団司令部の建物を大学の本館として利用し、その後大学記念館として利用しております。当時のままの場所に107年経っている国の登録有形文化財でございます。そちらには右下二つ目の写真でございますが、来館者の皆さんの多くが見られて感動なされる一面でございます。右下の写真は本学学生が博物館過程、学芸員過程の実習で大学記念館にて実習しているところです。学生は本当に一生懸命メモをとっているところで、良い写真だと思っております。左の写真はオープンキャンパスにおける高校生の来館風景です。そして昨年9月、JRさわやかウォーキングといいまして、駅から駅に歩く催しがあります。その立ち寄りポイントにノ

ミネートされ、愛知大学前駅から豊橋駅まで約9キロのコースを、各自のペースで自由に歩かれます。2, 100名が本学をそのうち1, 234名が大学記念館を来館されました。今後も開かれた大学記念館、センター運営をしておりますのでご理解とご支援をお願い申し上げます。

皆様のご協力のもと、この会を無事に終了させていただきました。誠にありがとうございました。



表紙写真ご芳名

有森	中島	高遠
川原	藤田	星
加島	池田	小崎
三好	荒尾	関谷
各務	岡村	川井
堀田	岡村	清水
阿部	池田	釜井
村尾	池田	松井
殿岡	荒尾	佐藤
中川	小崎	山口
倉持	関谷	松下
田辺	川井	松本
阿部	清水	佐藤
小川	釜井	佐藤
奥村	釜井	佐藤
森	松井	佐藤
夏目	松本	佐藤
林	山口	佐藤
中子	佐藤	佐藤
平井	片淵	佐藤
小川	片淵	佐藤

本間先生欽慕の会

平成27年5月9日(土) 東京小平霊園



写真お名前(敬称略)

森健一

加藤大策

荒尾仁恵 村上武

荒尾与志子 小川悟

本間万里子

高橋光子

由比淳子

関口忠彦

岩間毅 藤田佳久

伊藤寛一 山内喜充

高井和伸 間宮信夫

飯塚啓

殿岡晟子 小崎昌業

加茂傑 熊谷範一郎

中山弘 中子良吉

荒尾初雄

中川善弘 夏目益良

村尾竹一 杉浦福夫

奥村進

鈴木修 中島寛司

小平霊園の墓前に、愛大、書院、同窓生 33 名が集い、法要が行われました。杉浦前副会長の司会進行により、村尾副会長、鈴木事務局長の挨拶、中子さん先導による「般若心経」、院歌斉唱。高井さん音頭による寮歌・逍遙歌「月影砕くる」を高唱。

各位拝礼を終え、記念写真を撮りました。(遅れてみえた2名様には失礼しました。)

直会は、米内家石材店にて行われました。鈴木事務局長から佐藤学長の挨拶代読、内容は今年の入試志願者状況の好調、名古屋校舎二期工事の進捗状況など、母校発展の現況に接し、一同感動の拍手を贈りました。

殿岡さんからは、由緒ある日本酒、紹興酒などの提供とご挨拶があり、いつもの感謝。献杯のあとは、美味しい幕の内、美酒を頂きなかせらの歓談。皆さん幸せなひと時に浸りました。





根津山洲先生墓参 桜花忌
平成27年4月2日(木) 横浜の鶴見総持

根津先覚の墓前に、正午に参集、献花にお線香。般若心経を唱え、院歌、長江の水など献じました。根津先生の隣には、水野梅暁先輩のお墓もあり、毎年同じように、お線香 献花して、参拝しています。総持寺の境内は、満開の桜 天気も満開。直会は鶴見西口の蓬萊春飯店にて。ビールで献杯。また、藤田先生の2014年度愛知大学同窓会最優秀奨励賞受賞(授与式は2015年3月7日に開催)にも乾杯しました。美味しい料理に紹興酒、話題に事欠かず、元気創生のひと時になりました。同文書院閉校から愛知大学の旧制大学としての創設、入学生の多様さ、教授連の優秀さなど。上海交通大学ほか教育機関にて、書院の学績や愛大の教育などにも関心を持たれている、など。健康談義にも花が咲き、運動方法にも納得の数々でした。

参列者：藤田佳久(愛知大学名誉教授)、小崎昌業(42期)、熊谷範一郎(42期)、関谷賢三(44期)、幅館卓哉(44期専)、村上武(18期準)、小川悟、中島寛司の8名。(敬称略)



荒尾東方斎先生墓参
平成27年10月28日(水) 東京谷中の全生庵

定刻正午に墓前に集い、参拝のあと中子さんのお元気な般若心経に導かれ、院歌 長江の水 嵐吹け吹け 桃李の吹雪 愛大逍遥歌など献じ、お墓を後に。いつもの本殿前の階段にて記念撮影。庫裏に移り、ビールで献杯、お寿司をいただき、しばしの歓談。

2016年は、荒尾先生の没後120年になり、改めて荒尾先生の顕彰法要をしたいと、皆様のご賛同をいただきました。来年は、愛知大学の創立70周年にもあたります。

参列者：(後ろ左から)中島寛司、村上武(18期準)、小川千尋、小川悟、(前左から)藤田佳久(愛知大学名誉教授)、中子良吉(44期予)、小崎昌業(42期)、関谷賢三(44期予)、の8名(敬称略)

東亜同文書院大学記念センター活動レポート

①愛知大学公館100年物語」出版記念講演会を開催

6月28日、精文館書店豊橋本店にて『愛知大学公館100年物語―旧陸軍第15師団長官舎から「知のサロン」へ―』（愛知大学東亜同文書院大学記念センター編、2015年3月、株式会社あるむ刊）出版記念講演会を開催しました（主催株式会社精文館書店、共催株式会社あるむ、愛知大学東亜同文書院大学記念センター）。

愛知大学公館とは、1912（明治45）年に旧陸軍第15師団長官舎として建設され、その後、陸軍教導学校、陸軍予備士官学校校長の官舎として利用された木造平屋建ての和洋館併設の建物です。戦後は、愛知大学学長や学部長の住宅、外来講師の宿舎として80年代後半まで利用され、現在も創建当時の姿を残しています。2002（平成14）年には豊橋市の文化財に指定されました。

出版記念講演会では、3名による講演が行われました。

- ◆講演1. 「軍都豊橋と旧陸軍第15師団長官舎」
藤田佳久氏（東亜同文書院大学記念センターフェロー・本学名誉教授）
- ◆講演2. 「ファインダー越しの愛大公館・物語」
新村猛氏（東松照明から学ぶ寺子屋写真教室主宰、公益財団法人日本写真家協会会員）
- ◆講演3. 「愛知大学公館と愛知大学記念館」
田辺勝巳氏（愛知大学豊橋研究支援課長）

また、開催に先立ち、6月12日から7月12日の期間、同書店1・2階階段エリアにて『愛知大学公館100年物語』出版記念 写真パネル展」を開催しました。書籍に掲載した中からの選りすぐりの写真のほか、未公開分をあわせて16点展示し、来店された多くの方にご覧いただきました。



『愛知大学公館100年物語』(株あるむ刊) 出版記念講演会

「軍都豊橋と旧陸軍第15師団長官舎」
◆14:00～15:00 講師 / 藤田 佳久 (ふじた よしひさ)

◆15:10～15:30 新村 猛 / 東松照明から学ぶ寺子屋写真教室主宰、公益財団法人日本写真家協会会員
「ファインダー越しの愛大公館・物語」

◆15:30～16:00 田辺 勝巳 / 愛知大学東亜同文書院大学記念センター(豊橋研究支援課長)
「愛知大学公館と愛知大学記念館」

2015. **6/28(日)** 定員60名 精文館書店 豊橋本店
3階コミック館奥特設会場(301号室)
開場・受付 13:30 開演 14:00 (16:00 閉会予定)

愛知大学公館100年物語
―旧陸軍第15師団長官舎から「知のサロン」へ―

主催：株式会社精文館書店 共催：株式会社あるむ、愛知大学東亜同文書院大学記念センター



② 松本展示会・講演会を開催

10月1日から4日までの4日間、長野県の松本市美術館にて、愛知大学東亜同文書院大学記念センター主催／文科科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業の展示会・講演会「東亜同文書院大学から愛知大学へ」を開催しました。

この展示会・講演会は毎年開催している事業で、歴史的資料や写真、関係者の講演を通じて、本学そして本学と関わりの深い東亜同文書院への関心と理解を深めていただくことを目的としております。

これまで横浜、東京、弘前、神戸、シカゴ、京都、米沢、名古屋、富山、沖縄、長崎、岐阜、広島での実績があり、15回目となる今回は、長野県松本市での開催となりました。松本市は、本学第3代学長である小岩井浄のゆかりある地です。展示会場では、東亜同文書院大学と愛知大学に関する展示のほか、小岩井浄の生い立ちからご当地とのつながり、そのほか各エピソードを紹介した特設展示コーナーを設け、市民の方々に東亜同文書院と本学が身近な存在であることを紹介致しました。

期間中の来場者数は、延べ220名にのぼりました。講演会では、松本市文書館前館長の小松芳郎氏をはじめ、3講演を行いました。

◆講演1. 「小岩井先生と松本」

小松芳郎氏（松本市文書館特別専門員、前同館館長）

◆講演2. 「小岩井先生との思い出」

可児光治氏（愛知大学文学部文学科（昭和33年）卒、元東邦高校教諭）
祖父江哲一氏（愛知大学法経学部経済学科（昭和37年）卒、松本革新懇代表世話人、松本市歴史の里あゆみの会（ガイドボランティア））
熊谷達三氏（愛知大学法経学部経済学科（昭和31年）卒、元トワ物産株式会社取締役名古屋事業所長）

◆講演3. 「東亜同文書院大学から愛知大学へ／小岩井浄と本間喜一」

三好章氏（東亜同文書院大学記念センター長・現代中国学部教授）

また、展示会・講演会に先立ち、9月9日から30日の間、あがたの森文化会館（旧松本高等学校）の復元校長室にて「先行パネル展」を開催しました。旧松本高等学校復元校長室を初めて展示利用に許可された当センター

にとつて、数百名の来場者の方々に本学のルーツと小岩井浄を知ってもらえた意義ある催しとなりました。



東亜同文書院大学から愛知大学へ 松本展示会・講演会

松本が生んだ小岩井 浄 ～書院教授から愛知大学長へ～

2015年10月1日(木)～4日(日)
松本市美術館 2階多目的ホール

講演会 10月4日(日)	展示会 10月1日(木)～4日(日)
13:00～13:15 ごあいさつ	13:00～13:15 ごあいさつ
13:15～14:00 開会 元学長 愛知大学長	13:15～14:00 開会 元学長 愛知大学長
14:00～14:15 心懸 愛知 松本市文書館特別専門員 小松芳郎氏	14:00～14:15 心懸 愛知 松本市文書館特別専門員 小松芳郎氏
14:15～15:00 可児光治氏 愛知大学文学部文学科(昭和33年)卒、元東邦高校教諭	14:15～15:00 可児光治氏 愛知大学文学部文学科(昭和33年)卒、元東邦高校教諭
15:00～15:15 祖父江哲一氏 愛知大学法経学部経済学科(昭和37年)卒、松本革新懇代表世話人	15:00～15:15 祖父江哲一氏 愛知大学法経学部経済学科(昭和37年)卒、松本革新懇代表世話人
15:15～15:30 熊谷達三氏 愛知大学法経学部経済学科(昭和31年)卒、元トワ物産株式会社取締役名古屋事業所長	15:15～15:30 熊谷達三氏 愛知大学法経学部経済学科(昭和31年)卒、元トワ物産株式会社取締役名古屋事業所長
15:30～16:15 三好章氏 東亜同文書院大学記念センター長・現代中国学部教授	15:30～16:15 三好章氏 東亜同文書院大学記念センター長・現代中国学部教授

先行パネル展：9月9日(木)～9月30日(木) あがたの森文化会館(旧松本高等学校) 4階、復元校長室
お問い合わせ：愛知大学東亜同文書院大学記念センター
〒441-8622 愛知県豊橋市有明1-1
TEL: 0532-47-4139 FAX: 0532-47-4138 E-mail: Toa@aiichu.ac.jp

愛知大学東亜同文書院大学記念センター／文科科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業



③ 国際シンポジウム

「東亜同文書院の中国研究―その現代的意味」を開催

12月6日(日)、愛知大学豊橋校舎研究館会議室において愛知大学東亜同文書院大学記念センター主催の国際シンポジウム「近代日中関係史の中のアジア主義―東亜同文書院と東亜同文会」が開催されました。三好章 東亜同文書院大学記念センター長の開会挨拶、馬場毅 名誉教授の趣旨説明に続き5名の発表が行なわれました。

第1報告は、東亜同文書院大学記念センター・ポストドクターの野口武氏が「明治中期の貿易活動における日清貿易研究所の位置」という題で発表しました。1890年に日清貿易研究所を設立した荒尾精が、漢口楽善堂を経営した時期(1886～1889年)を中心に、漢口楽善堂は中国商人と商業取引を行う一方で、日本の阪神京浜貿易商社との間で委託販売を行っていたこと、そうした委託販売の背後に町田実一漢口領事による農商務省への情報提供があったことなどを、明治初期の大阪・関西経済の状況や、荒尾が中国渡航前に軍人として赴任した熊本への権力構造や経済策などを踏まえながら、詳細に述べました。

第2報告は、東亜同文書院大学記念センターの武井義和研究員が「山田純三郎の孫文支援について」という題で、1910年代から1925年孫文逝去直前までの時期に、山田純三郎が行った孫文への財政的支援活動の流れと、そうした活動において山田が関わった人間関係について明らかにしました。それらを考える場合、1921年の「中日組合格約」への山田の関与が、彼の活動を考える上で一つの転換点として捉えられるという指摘もなされました。

第3報告は、中国社会科学学院近代史研究所の李長莉研究員が「宮崎滔天と孫中山広州非常政府の対日外交―何天炯が宮崎滔天に宛てた書簡を中心に」という題で、孫文と共に革命に奔走した何天炯が、1920年から22年にかけて日本の友人である宮崎滔天に宛てた書簡を手掛かりに、孫文および広東政府と日本との関係について発表しました。孫文が次第に日本に対する批判を強め、また日本の中国侵略が強まっていく中で、宮崎滔天は日本政府のそうした方針に反対したことなどが明らかにされました。

第4報告は馬場毅愛知大学名誉教授が「大アジア主義から「脱亜入米」

へ」という題で、戦前から現代に至るまでの日本とアジアとの関わりについて、思想的側面から発表しました。明治維新後の近代日本の「脱亜入欧」下で誕生したアジア主義が、日中戦争開始後に「大アジア主義」へと変化し日本政府の政策とされたこと、一方、戦後GHQの占領下で「脱亜入米」が始まり、サンフランシスコ講和条約で主権回復した日本は冷戦体制下でアメリカに従属しながら、大東亜共栄圏構想に含まれていたアジアの国々と賠償・準賠償を通じて関わっていったこと、しかし日本は独自の視点や哲学でアジアに向きあってきたとはいえず、「脱亜入米」下の対米従属は今でも進行していると指摘し、今日的な問題点も含めて論じました。

第5報告は霞山会研究員の堀田幸裕氏が「東亜同文書院の「復活」問題と霞山会」という題で、霞山会が東亜同文書院の復活を意識して、1966年に中国科や貿易科等を置く1年制の各種学校「東亜学院」を設置したものの、運営をめぐる問題などにより大学昇格を果たせないまま、1975年に各種学校としての歴史を閉じたことについての経緯が、詳しく述べられました。

各報告後の質疑応答や最後の総合討論では、フロアから質問やコメントが寄せられ、活発な議論が展開されました。50名ほどの来場者があり、遠方より東京、岡山、熊本からの研究者が、一方では高校生や本学卒業生を含めた一般の方が参加されるほどの盛況となりました。



④シンポジウム「海外からの大学引き揚げをめぐる問題とその位相——東亜同文書院から愛知大学への人事的接合性と自国文化への接合——」を開催

2016年2月21日(日)午後1時から、愛知大学豊橋校舎本館5階において愛知大学東亜同文書院大学記念センター主催のシンポジウム「海外からの大学引き揚げをめぐる問題とその位相——東亜同文書院大学から愛知大学への人事的接合性と自国文化への接合——」を開催しました。

2012年から開始している私立大学戦略的基盤形成事業「東亜同文書院を軸とした近代日中関係史の研究」の一環である本シンポジウムは、「書院から愛知大学への接合性」グループが中心となって行ったものです。

◆報告1.「本間喜一——東亜同文書院大学・同呉羽分校・そして愛知大学——」

藤田佳久氏(東亜同文書院大学記念センターフェロー・本学名誉教授)

◆報告2.「小岩井浄とその時代——1945年前後を中心に——」

三好章氏(東亜同文書院大学記念センター長・現代中国学部教授)

◆報告3.「東亜同文書院大学教員と愛知大学教員の人事的側面における接合性」

加島大輔氏(愛知大学文学部准教授)

◆報告4.「東亜同文書院大学から愛知大学へ「継承」されたものは何か——教員の系譜から——」

広中一成氏(東亜同文書院大学記念センター研究員)

◆報告5.「新中国建国初期の大学再編——上海の大同大学の再編を事例として——」

武小燕氏(名古屋経営短期大学講師)

◆報告6.「旧制愛知大学予科への転入予科生は404人——」

小川悟氏(表現技術研究所代表、愛知大学昭和33年卒業生)

報告に先立ち、冒頭の川井伸一愛知大学長のあいさつに続き、今回は神野信郎氏にごあいさつをお願いしました。神野氏は愛知大学名誉役員という称号をお持ちであることからわかるように、長年愛知大学の理事として大

学経営に関わってこられました。それだけでなく、お父上神野太郎氏は海外からの大学引き揚げという特殊な事情を理解され、創設期の愛知大学への物心両面にわたる支援をされた方でした。シンポジウム当日の神野信郎氏のごあいさつは、創設期の愛知大学教員と神野家のつながりの深さにも触れていただきました。

最初の藤田報告、次の三好報告は、神野氏のごあいさつとともに「人物」に中心を当てている点で一つのまとまりをなしています。これら二つの報告は本間喜一、小岩井浄という東亜同文書院大学から引き揚げ、愛知大学設立に奔走した人物に焦点をあてたものです。このうち、藤田報告は本間の生い立ちからの経歴、またその出身地である山形県川西町(旧玉庭村)の風土にも触れながらその思想的バックグラウンドを探るものでした。本間はその後上京しますが、そのなかで「パイオニア精神とバランス感覚」「変化の客観視」「責任論」「理性ある正義とベースに法哲学」などの姿勢を身に着けたとします。また、愛知大学設立には呉羽分校での大学再編の議論がベースにあったことを明らかにしました。

三好報告もまた、小岩井の生い立ちから説き起こし、その学歴の上昇とともに見えてきた国家像が小岩井自身の理想とかけ離れていたこと、それでも小岩井は学歴によって得られた地位に安住することなく活動していくこと、しかし結果的には思想的転向を余儀なくされたことを示しました。これはいわば小岩井の挫折であったわけですが、その後上海の地で「自由」を経験することで「思想的、精神的休養」がなされ、そしてさらにその期間に知り合った本間との関係がその後の愛知大学設立につながっていくという、小岩井の思想的遍歴を明らかにしました。

これら「人物」に迫った報告に続き、東亜同文書院大学、また愛知大学の教員たちに焦点をあてたのが次の加島報告、広中報告です。まず加島報告では、東亜同文書院大学、愛知大学それぞれの学部開設時、創設時の教員層の履歴分析を通じて、両者の関係性を明らかにしようとしていました。書院大学は「実業」性、そして愛知大学ではアカデミズムが教員層を支配していたこと、またそのアカデミズムが大学のない土地に新しくそれを立ち上げるのに役割を果たしたのではないかとということ、また愛知大学創設期に東海地方出身者が増えることで地縁ができてきたのではないかとということ論じました。

広中報告は、東亜同文書院から愛知大学に「継承」されたものを、教員を

「物差し」にして検討するという課題に基づいたものです。1900年に根津一によって書かれた「興学要領」が示したのは、儒学の思想を根本にして実学を学ばせるということでした。

そのいわゆる「根津精神」が、根津の後任として倫理を担当した山田謙吉とその子息・厚に引き継がれていくことを示しました。さらにそれは、愛知大学の教員ともなった斎伯守によって継承されていくことを論じました。

さらに本シンポジウムの課題を深めるために最後に二つの報告が行われました。まず、武報告は、中国を舞台として、一つの大学が国家権力の変動とともにいかに変容していくかを明らかにしました。その変容を推し進めたのは、単に新しい国家権力による制度的な側面だけではなく、中国に伝統的に存在する文化的側面と、それを支持する学生層からの圧力によっていることを明らかにしています。武報告は、そうした圧力が大学教員層との軋轢を生んでいたことも指摘しました。

小川報告は、そのタイトルからわかるように、愛知大学旧制予科への転入生はいかなる学校から移動してきたのかを明らかにしたものです。転入者本人への聞き取りも含めて行われた調査により、書院大学出身者が約4割、それ以外の学校出身者が約6割という量的側面とともに、具体的な学校名も含めて明らかにされています。「個別情報の積み上げ」とする本報告は、愛知大学の学生に焦点をあてて、基本的な状況を明らかにした研究となっています。

愛知大学東亜同文書院大学記念センター主催2015年度シンポジウム
文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業

海外からの大学引き揚げをめぐる問題とその位相

—東亜同文書院大学から愛知大学への人事的接合性と自国文化への接合—

東亜同文書院大学から愛知大学への接合性という問題は、海外からの大学引き揚げという世界に類を見ない事例であり、そのことによる研究が求められています。加えて、引き揚げによって国家の内部と外部の文化がどのように接合していったかという問題もまた、歴史の重要な課題です。本シンポジウムでは、次の二つの視点からの報告を軸として海外からの大学引き揚げと人事的接合性、さらには自国文化への接合性という課題を掘り下げていきます。一つ目は、初期愛知大学の発展を、文字通りあるいは入学者の視点から考えます。また、二つの大学の歴史的な関係性や、人事の接合性として考え、教員の人事的接合性、思想的接合性から両者の関係を明らかにします。二つ目は、東亜同文書院大学から愛知大学への引き揚げの事実自体をいっぺんに見直し、そのために、中興と再興の成立という社会と国家の変遷における大学の接合と変容の歴史をたどっていきます。

13:00-13:30
あいさつ 川井作一 (愛知大学長・教授) 神学部長 (ルーテル大学神学部)、小島が文書式社副社長、ホテルアークリッシュ副社長、愛知大学名誉教授)

13:30-14:00
総括説明 加島大輔 (愛知大学文学部教授)

14:00-14:30
「本問題—東亜同文書院大学・同員別分校、そして愛知大学—」
藤田長久 (愛知大学名誉教授・東亜同文書院大学記念センターフェロー)

14:30-15:00
「小岩井派とその時代—1845年前後を中心に—」
二好学 (愛知大学名誉教授・東亜同文書院大学記念センター)

15:00-15:15 休憩

15:15-15:45
「東亜同文書院大学教員と愛知大学教員の思想的側面における接合性」 武小燕 (愛知大学東亜同文書院大学記念センター研究員)

15:45-16:15
「新中国建国初期の大学再編」
武小燕 (愛知大学東亜同文書院大学記念センター研究員)

16:15-16:45
「旧制愛知大学への転入予科生は404人」
小川悟 (愛知大学東亜同文書院大学記念センター研究員)

16:45-17:00 休憩

17:00-17:45
総会討論

日時: 2016年2月21日(日)
場所: 愛知大学豊橋校舎本館5階第3・4会議室
愛知大学東亜同文書院大学記念センター

愛知大学 AICHI UNIVERSITY
TEL: 0532-47-4139 FAX: 0532-47-4196 E-mail: ts@aiichi-u.ac.jp



⑤ JRさわやかウォーキング（JR東海主催）が大学記念館にて開催されました

JR東海主催の「JRさわやかウォーキング」に「軍都」と呼ばれた豊橋市の歴史遺産を訪ねて」と題した新コースが設けられ、9月19日（土）、愛知大学前駅がスタート地点となる歩行距離約9kmの約3時間コースが開催されました。

初めて豊橋校舎がウォーキングコースとなり、大学記念館が立寄りポイントとなりました。豊橋市および豊橋観光コンベンション協会は、多くの来訪者を集めるために努力なされており熱心なオファーにより開催が決定しました。

天候に恵まれたこともありコース参加者は2,020名、大学記念館には1,234名が来館されました。コース参加者は各自の時間調整にまかされていることから、8時から学内を歩かれる方がおり、14時近くまで大学記念館を訪れる方がいました。地域に開かれた愛知大学として、地域貢献できたかと思いません。

「ウォーキングコース「軍都」と呼ばれた豊橋市の歴史遺産を訪ねて」

愛知大学前駅↓大学記念館（旧陸軍第15師団司令部庁舎↓向山緑地↓豊橋公園（歩兵第18連隊基地跡）↓豊橋市役所↓湊公園（豊橋空襲犠牲者追悼の碑）↓こども未来館（こども）↓豊橋駅





東亜同文書院大学

愛知大学のルーツ校「東亜同文書院大学」は、1901(明治34)年に上海に誕生した「東亜同文書院」が発展し、1939(昭和14)年に大学へ昇格して成立したものです。

当時の東アジアは欧米列強の圧力が清国へ一層強まる中、日本も危機感を抱いていました。そのような中、弱体化しつつある清国と提携し、東アジアの安定を図ろうとする動きが、それまでの欧米指向中心であった日本の中に新たに芽生えました。

それをまず具体化したのが、荒尾精による日清間の貿易をめざし、貿易実務者を養成しようと1890(明治23)年に上海に開学した日清貿易研究所で、卒業生約90名を輩出しました。

しかし、そのあと日清戦争が始まり、荒尾がめざした当初の目的は達成できませんでした。日清戦争が日本の勝利におわり、清国への賠償金問題で世論が盛りあがりを見せたときにも荒尾は、清国への賠償金請求に反対表明を繰り返しました。また、日清間の貿易発展のための方策を検討していきました。

一方、近衛家の筆頭となった近衛篤磨は独学のうえ、ヨーロッパ留学を経験しました。2度目のヨーロッパ訪問時にはヨーロッパ列強のアジア戦略情報を知ると、東アジアの安定化のためには、日清間での教育、文化交流の必要性を痛感したのです。そこで、1899(明治32)年、近衛は帰路、清国に立ち寄り、近代化への改革をめざす実力者である劉坤一や張之洞の両総督に会い、日清両国学生と一緒に教育する学校を南京に開設する構想を提案し、承認を得たのです。

1900(明治33)年、近衛は両総督との協議により、南京に「南京同文書院」を開学し、日本人入学生24名は、

清語、英語、商業、政治などを学び始めました。

「南京同文書院」開学前には、両総督より、南京清国学生を、南京で教育を受けるよりも日本へすぐに留学させたい、との申し出がありました。近衛は東京自宅に「東京同文書院」を開設し、受け皿としました。なお、日清両国学生と一緒に学ぶようになったのはそれより約20年後のことです。

「南京同文書院」は設立直後、北清事変によって南京の危機が高まったため、上海へ移動することとなりました。近衛は発展を図るべく新たな全国府県費(給付奨学金)制度を設け、学生募集をし、1901(明治34)年、上海高昌廟にキャンパスを設置し、「東亜同文書院」に改名しました。「東亜同文書院」初代院長には根津一が就任し、荒尾精が意図した日清間の本格的な貿易実務者を養成するビジネススクールとして誕生したのです。カリキュラムは、清語、英語の語学と貿易、商業科目を重点的に配置し、特徴的な科目として、中国国内を主なフィールドワーク先とした「大調査旅行」が配置されました。

根津は、荒尾精と近衛篤磨の意志を受け継ぎ、永く院長を務めました。根津院長は中国古典をベースにした倫理学の授業をもち、卒業生がビジネス界で活躍する際の倫理や徳の必要性の指針を示し、書院生から神様のように尊敬されました。

「東亜同文書院」は、1945(昭和20)年、敗戦とともに幕を閉じました。卒業生約5,000名を輩出し、活躍は多方面にわたります。なお、多くの入学生は府県費生(給付奨学生)として入学、書院の経営は東亜同文会が担いました。のちに、書院の卒業生も同会で活躍しています。

以上の経緯から、荒尾精、近衛篤磨、根津一は東亜同文書院を設立した三聖人といわれています。

荒尾精

(1859-1896)



東亜同文書院の前身、日清貿易研究所を上海に開設。

近衛篤磨

(1863-1904)



初代東亜同文会会長

根津一

(1860-1927)



初代東亜同文書院院長



愛知大学

愛知大学は、1946(昭和21年)年、東亜同文書院大学最後の学長本間喜一や、小岩井浄、神谷龍男、木田彌三旺はじめとした東亜同文書院大学関係者が中心となり、愛知県豊橋市長の支援もあり、豊橋市の旧陸軍士官学校(旧陸軍第15師団)跡地に、当時、中部地区唯一の法文系大学として創立された。設立にあたり、吉田茂内閣総理大臣に旧制大学として許可され、日本で第49番目の開学であった。

愛知大学は、戦後混迷の時代、初代学長林毅陸、第2・4代本間喜一、第3代小岩井浄らにより礎が作られた。愛知大学の「愛知」は「智=知を愛する者が集う」を意味し、設立趣意書には戦後創立された大学としては画期的な「国際的な教養と視野をもった人材の育成」「地域社会への貢献」が明記されている。

そして、帰国時に上海から持ち帰った東亜同文書院の学籍簿・成績簿を、愛知大学にて保管している。

初代学長(1946-50)



はやし きろく
林毅陸 [1872-1950]

第2代学長(1950-55)
第4代学長(1959-63)

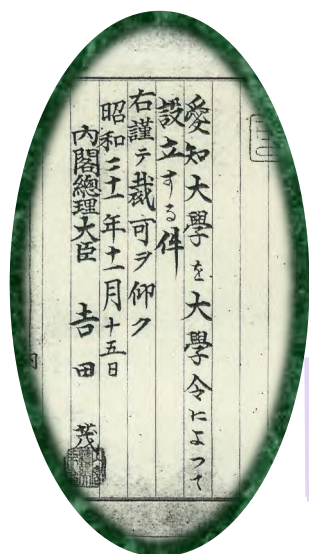


ほんま きいち
本間喜一 [1891-1987]

第3代学長(1955-59)



こいわい きよし
小岩井浄 [1897-1959]



小崎外交官、世界を巡る

東亜同文書院大学、愛知大学から
各国大使・公使としての軌跡

小崎昌業 (東亜同文書院大学第42期生・愛知大学第1期生)



あるむ

第1部 東亜同文書院大学から愛知大学へのわが人生

1. はじめに
2. 青島時代
3. 水口中学時代
4. 東亜同文書院大学への入学
5. 東亜同文書院大学での学生生活
6. 個人で大旅行
7. 書院卒業の外交官
8. 学徒動員
9. 上海へ引き揚げ
10. 愛知大学の創設

第2部 東亜同文書院大学から愛知大学へ、 そして外交官として世界を巡る

1. はじめに
2. 東亜同文書院大学の生活
3. 大旅行と先輩たち
4. 在中国公館と先輩たち
5. 学徒動員と軍隊生活
6. 愛知大学の創設
7. 外交官の仕事
8. 霞山会

第3部 東亜同文書院記念基金会受賞時の記録

第4部 “愛知大学の前身” 東亜同文書院大学

小崎外交官、世界を巡る

東亜同文書院大学、愛知大学から各国大使・公使としての軌跡

東亜同文書院大学第42期生、そして愛知大学第1期生として2つの大学に在籍し、卒業後は外交官として各国で活躍された小崎氏のライフストーリー。本書は一般の方や学生に向けてわかりやすく書かれており、多くの写真を掲載しています。

愛知大学東亜同文書院記念センター 編

A5判/並製 114頁 ISBN978-4-86333-105-1 C0323

本体価格 926円＋税 2016年3月30日発行

発行・販売 株式会社あるむ

ネット書店でも購入できます [amazon](#) [紀伊國屋書店](#) [楽天ブックス](#) [ブックサービス](#)



AICHI UNIVERSITY

2016年11月15日、愛知大学は創立70周年を迎えます。



愛知大学は1946年に中部地方において、初めての法文系大学として愛知県豊橋市に誕生しました。その前身は、第二次世界大戦前、海外にあった日本の高等教育機関であり、とりわけ中国の上海にあった東亜同文書院（のちに大学）が中心となりました。

東亜同文書院大学記念センターは、1993年に設立して以来、本学の「生みの親」ともいえる東亜同文書院大学の総合的研究と、書院を継承した愛知大学史の研究を進めており、その成果はシンポジウムや紀要、ブックレットにて発表してきました。

現在は、文部科学省の研究プロジェクト「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」の採択を受け、2012年から5年にわたり、5つの研究グループのもと研究を進めています。

研究活動のほか、センターがある大学記念館には本学の歴史などを紹介する展示室があり、見学者への案内・解説もしています。来館者数は年間4,000名を超え、本学学生のほか、高校生や国内外からの研究者など、広く来館いただいています。来館者の中には史資料を寄贈くださる方もおられ、整理・保存活動も行っています。

センター事業に賛同をいただけ、東亜同文書院大学・愛知大学に関する資料等を提供いただける方は、当センターまでご連絡ください。お待ちしております。

大学記念館／東亜同文書院大学記念センター
連絡先 05321474139
開館時間 10時～16時
休館日 月・日・祝日・大学が定める休日

国際シンポジウム

- 2015年 「近代日中間係史の中のアジア主義-東亜同文書院と東亜同文会-」
- 2014年 「東亜同文書院の中国研究-その現代的意味」
- 2013年 「近代日中間係史の中の東亜同文書院」
「孫文と東アジアの平和」
- 2012年 「近代台湾の経済社会変遷-日本とのかわりめをめぐって-」
- 2011年 「辛亥革命・孫文・東亜同文会」
- 2010年 「戦前外地にあった愛大ルーツ5校の出身学生が語るアジアと愛大」
- 2009年 「欧米研究者から見た東亜同文書院」
- 2008年 「東亜同文会の東アジアにおける教育活動とその展開」
- 2007年 「日中研究者による東亜同文書院研究」
「世界と日本の大学史の流れの中での東亜同文書院と愛知大学」

展示会・講演会

- | | |
|-----------|-----------|
| 2015年 松本 | 2010年 京都 |
| 2014年 広島 | 2009年 神戸 |
| 2014年 岐阜 | 2009年 シカゴ |
| 2013年 長崎 | 2008年 福岡 |
| 2012年 沖縄 | 2008年 弘前 |
| 2011年 富山 | 2007年 東京 |
| 2010年 名古屋 | 2006年 横浜 |
| 2010年 米沢 | |

出版物

- ・同文書院記念報（vol.24まで刊行）
- ・ブックレット（第9巻まで刊行）
- ・愛知大学創成期の群像 など

スタッフ紹介



（左から）個センター研究員、野口センターP.D、藤田名誉教授（センターフェロー）、田辺豊橋研究支援課長、武井センター研究員、森センター職員



愛知大学東亜同文書院大学記念センター



愛知大学東亜

検索